人と活動のつながりづくりを応援する

にしとも広場

2021
17号

いま、出会い直しの時
新しい発見と広がる楽しみ。
地域と、人と、自分と。

にしく市民活動支援センター
にしとも広場

左から　加世田、中畝さん、佐久間さん、清田さん

座談会
地域との出会い直し

地域やおうちにいる時間が長くなって自分の住む地域を見直す機会も増えてきました。
2020年12月に、西区の皆さんとの座談会を通じて、地域ともう一度出会ってみました。

座談会メンバー

NPO 法人レスパイト・ケアサービス萌
代表理事　中畝（なかうね）治子さん

地域で生活する医療的ケアの必要な子どもたちの支援（主に訪問看護）を実施。亡くなった息子も障がいがあり、親の立場でいろいろな事を経験した。本職は日本画家で、障害がある方のアート活動の場もつくっている。

事務所：〒220-0061
西区久保町4-12
三ツ矢ビル3階
連絡先：:045-231-1681

横浜デザイン学院
日本語学科　教務主任　佐久間みのりさん

2002年に日本語教師として就職。横浜デザイン学院全体の学生数は480名。日本語学科には現在130名程が在籍。日本の美大に入学したい、就職したい人や、日本のポップカルチャーが好きな学生が30カ国から学びに来ている。

事務所：〒220-0051
西区中央1-33-6
連絡先：045-323-0300

（株）タウンニュース社　横浜中央支社
中区・西区編集室　清田（せいた）義知さん

2013年より中区・西区の編集室長を担当。毎週木曜日に紙版・WEB版のタウンニュースを発行し、地域情報を発信しています。イベント開催や冊子の作成なども行う。

事務所：〒231-0033
中区長者町2-5-14
セントラルビル2F
連絡先：045-227-5050

にしとも広場
センター長　加世田（かせだ）恵美子

企業向け人材育成研修を行っていた会社から母の認知症発症もあり現職へ転職。2011年より横浜市市民活動支援センター勤務、2017年度からにしとも広場センター長。

事務所：〒220-0051
西区中央1-5-10
西区役所1階
連絡先：045-620-6624

「地域との出会い直し」はあたり前をもう一度考えてみること?!

中畝：福祉業界では「地域」という言葉をよく使いますが、よくわからない言葉ですよね。レスパイト・ケアサービス萌（以下、萌）では、ガッツびーと西さんのお声掛けで、西区内の関係機関が集まり連携をとれば、医療ケアの必要な障がい児者の宿泊もできるのでは、との話し合いが始まったところです。

私自身は、子育てをしていた時に「障がいを理解するための講座をやってほしい」と頼まれ、はじめて親の立場で社会に出ました。学びがあって、いい経験になって、地域のお母さんたちともつながりましたね。仕事をしているときは地域にいなくて、しばらく空白期間がありました。

清田：タウンニュースの取材は、いわば地域密着の仕事ですが、実は、自分の住んでいる地域のことは分かっていないです（苦笑）。どうやら仕事モードと、プライベートの自分は違うようです。この先を見据えた人生設計を考えると、地域でライフワークになるものを見つけたいなと思っています。

加世田：私も、仕事として地域と関わっている部分はありますね。

清田：悪いことではありませんが、仕事のことが頭の中で７割８割と占めてしまいます。それ以外の生き方もあるべきかな。「自分の何かを見つける時代」なのかもしれませんね。

佐久間：私は日本語教師なのでつい言葉の意味を考えてしまうのですが、「出会い直す」の直すは、読み直し、見直しのように、「やってみたけれど問題があってやり直す」ことですよね。普段当たり前に使っているから、何か機会がないと「日本語」との出会い直しを考えない。留学生と話すときは「やさしい日本語」といって、わかりやすい日本語で話そうと意識して、常に言葉と出会い直している感覚があります。言葉の意味としては、当たり前をもう一度考えてみることかなと思いました。

実は、仕事をするだけでは地域と出会うことはあまりないですよね。学校と寮の往復、という留学生も多いです。そんな理由からか、小中学校で外国につながる子の授業の通訳を行う母語支援のボランティアは、学生からも人気があります。彼らが勉強した日本語を使って、支援されるばかりでなく役立つことを通して、地域に触れる場面を作っていきたいです。

中畝：「障がい」も地域の方にどうやったら伝わるのか、悩んでいます。制度が整ってきたことは良いことなのですが、制度が整うと、地域で姿が見えなくなっていきます。

日中、施設に行くようになって施設と家の往復で一生過ごす、また逆にヘルパーが来てくれるけど外に出ることは難しいと、家族も孤立しがちです。そんな時に、家族を支える近所の方のサポートがあればいいなと思う。大げさなことではなくて、ごはん作ってくれたり、ごみを出してあげるなど、ちょっとしたことでも仲間がいるといないでは全然違います。

中畝：佐久間さんがお話しされた、留学生の方も受ける側だけではなく、やる側になることは大切ですね。最近、「認知症の本人が声を上げて、本人がどうしたいか声を聞くようになった」と聞きましたが、今まで本人のことを聞いていなかったの？と思ってしまいます。

佐久間：学生も誰かの役に立つことが支えになっています。受験を目的に勉強していた学生も、なぜ日本語を勉強したいのか改めて考える機会にもなっているようです。

清田：留学生のなかで、生き方、哲学みたいなもの、社会的概念の違いで理解が違うことはありますか？

佐久間：宗教の違いについての戸惑いは大きいです。宗教によっては、食べられないものがありますが、時には対応してもらえないこともあります。藤棚商店街の今井かまぼこさんの製品には豚肉が入っていないと学生が喜んでいました。イスラム教の人などいろんな人の話を聞く機会がありましたが、当事者の話を聞くことは大切ですね。

加世田：萌さんが関わることで利用者さんが変わることはありますか。

中畝：医療ケアの必要な子どものお母さんは本当に人と接する機会が少なくなっています。夫婦のことなど、私たちはどうしようもできないのですが、萌が入ることで、外から風が入ってくる感じのようです。

コロナ禍でも、だからこそ。

中畝：今の世の中は、人に会うことが命に関わってしまうので、会うこと自体が難しいし、怖い思いがあります。でも、もっと、出会いたいですよね。

佐久間：今年は国際交流もできません。でも、今だからこそできることもあるのではないかと考えています。地域で暮らす留学生や外国人、障がいがある人もいて、多様性と出会う場所があるといいな…これからも地域に関わっていきたいです。

加世田：にしとも広場ではオンラインにも取り組んできましたが、どこかでしっかり「会う」ことが大切だと感じます。遠くの人とつながれるメリットはありますが、やっぱり対面で会えることは大事だと思います。

清田：オンラインは意志決定には向いていますが、座談会には向かないですね。今日は、多様性をつなぐ場所が必要だと思いました。現場の記者たちは、関わることが楽しくて仕事をしていますが、会社としての強みはやはりここにあると実感しました。自分に何ができるのかが大事ですね。

最後に、読者の皆さんに一言

清田：仕事について考え直すきっかけにもなりました。私のような現役世代は、地域の活動に参加してみることがまずは始まりだと思います。

佐久間：当たり前の事を見直してみると、新しい発見があるかもしれません。日本語を話すことがボランティアになることもある。留学生の話を聞いてくれるところから、始めてみませんか。

中畝：安心して認知症になれる地域で生活したいですね。

加世田：みなさん、ありがとうございました。

地元のご縁の橋渡しの場に!!

介護の事情から、働きに出るのではなく地域でできる仕事をと考えて、元々家族が経営している電気屋さんの横で、3年前からクリーニング取次店とソーイング店をはじめました。

クリーニングの仕事は、お客様の要望を確認するためにコミュニケーションが求められる仕事です。「あそこの銭湯だった場所は何になるの?」など、なにげない会話の中から、多くの人が地域に関心を持っていることに気が付きました。

2019年度に「西区地域づくり大学校」を受講して、「地域のご縁の橋渡し」になればと「ニュースレターとべとべ」を発行。毎回100部ほど印刷して、お店にきたお客様に渡しています。表面はお店の情報、裏面にはちょっとした地域の情報を紹介しています。

丹羽さんが感じるこの街の魅力は、なんといっても歴史。すぐ近くの「横浜道」は、幕末の横浜開港に際して、東海道と横浜港を結んでいた街道です。お客様とも、まちの歴史談義に花が咲きます。

お店の近くもマンションが増えていますが、日頃の挨拶や何気ない会話を大切にし、人と人が縁でつながる橋渡しをしていきたいと思っています。

ニュースレターとべとべ

場　所:〒220-0042
神奈川県横浜市西区戸部町4-143
連絡先:045-241-0427　丹羽峰子さん

双子と一緒に、地域密着の居場所をつくりたい

はまみらい☆Twins　代表　鈴木美和さん

慣れない双子の育児が始まって

双子の妊娠が分かったときは、「まさか自分が双子を」と驚きと嬉しい気持ちでした。看護師としてNICU（新生児特定集中治療室）で働いた経験もあり、普通の人よりは子育てをやっていけるかなという自信もありましたが、仕事と自分の子の子育ては全く違いました。一人授乳が終わるともう一人、一人泣き止んだと思うともう一人が泣き出して…。6か月の頃でしょうか、体力も、気力も、睡眠不足も限界。家からも出られず、引きこもり状態でした。子育て支援の場にも出かけましたが、他の方と比べると、二人の子どもを見なければならない自分だけがあたふたしている気持ちになり、なんとなく居づらく感じてしまい、それなら外に出ず家にいたほうがいい、と思うようになりました。

地域密着の場所を立ち上げたい

SNSで双子ならではの悩みを検索してよく見ていましたが、偶然見つけた東京の双子のサークルに思い切って参加してから知り合いが増えました。お風呂のコツやおでかけの仕方などを教えてもらい、大変なのは変わりませんが、少し心に余裕を持つことができるようになりました。コロナで東京のサークルが活動自粛となったことをきっかけに、自分の住む地域でつながりを持っていこうと思い、2020年5月に「はまみらい☆Twins」を立ち上げました。

活動内容は、「オンライン双子会」と「おでかけ」です。働いているママもいるので、双子が寝静まった土日の夜に、ゆっくりZoomで話す時間をつくりました。参加した方からは、大人と話す機会がないので、気持ちを吐き出せる場があって良かったと言われました。

これからは地域に密着した居場所にして、困った時に、近くでちょっと相談できるつながりをつくりたいと考えています。双子の子育ては大変ですが、双子がいるからこそ、皆さんつながりを求めていて、心からつながることができる。いろんな人の意見を聞きながら育児をして、選択肢が増えていくような居場所にしていきたいです。

双子サークル はまみらい☆Twins
ホームページ：https://www.c-sqr.net/c/hamatwins/
Instagram/Twitter: hamamirai_twins

臨港パークへのお出かけの写真

オンライン双子会

料理人としての自分はこれからも

荒川隆光さん

当たり前の日常が大きく変わった瞬間

「海が近いので5歳ぐらいから釣りをしていた。大きくなると釣ったさかなを自分でさばき、じぃちゃん、ばぁちゃんやその友人にふるまった。おいしいと言ってもらうのが嬉しかった。」荒川さんは子どもの頃をそう振り返ります。熊本県で生まれ育ち、高校卒業後の進路に調理師の道を選びました。

東京やみなとみらいにも店舗を持つ、老舗日本料理店に就職、厳しい修行に耐え9年が経った頃、海外店へ転勤が決まりました。出国を2か月後に控えたある日、大きな事故に遭いました。

足は粉砕骨折し、治療が長引く中、くも膜下出血を起こす。大事には至らなかったものの、治療後も杖なしに長時間立つことは難しいとわかり、やむなく仕事をやめたのは、26歳の時でした。

料理がつなぐ出会い

「自分はこのまま死んでしまうのか？いつ死ぬかもわからないなら熊本で自分の店を持つ夢を叶えたい」と、看病に来ていた母親に訴えました。しかし、怪我の治療の目処が立つまでは横浜で過ごす必要があり、何かできることはないかと考えていた時、子ども食堂の存在を知りました。

生麦と金沢文庫の2か所でボランティアを始めたことを以前の上司に報告すると、「やるからにはその子たちにとっての“おふくろの味”になるよう努力しろ」と激励され、料理が人の役に立つことに改めて気づいたと言います。もっとボランティアをしたいとにしとも広場を訪ね、西区の障がい者施設「ガッツ・びーと西」で調理ボランティアを始めました。

目先だけでなく後先のこと

荒川さんに事故などの出来事は辛くなかったのか尋ねると、「事故後、すぐに前を向こうと思いました。“目先だけでなく後先のこと”、小さな頃からそう言われて育ってきたが、考えてみると子ども食堂や、障がい者施設で働く皆さんの事も、事故に遭わなければ知らなかった世界。全てが自分のために必要な事だったと感じるようになった」「出会った人たちから学ぶことも多く、仕事だけの頃より人に優しくなれたと感じている。自分が支えてもらったように、人を支えられるようになって行きたい」という言葉が返ってきました。

編集後記

「朝早く東京に出かけて、夜遅くに帰ってきた生活から一変、リモートワークでお昼の明るい時間を地域で過ごすことが増え、お昼は近所を散歩しています」と、おっしゃる方に出会いました。コロナ禍で、自分の住む地域に目が向く機会が増えてきたという方、多いのではないでしょうか。

自分から話しかけてみたら、いつものあの人の新しい一面を知ることができた。いつも通過するだけだった場所が、自分にとってほんの少し特別な場所に変わってきた、小さいけれど確かな実感。

ちょっとしたきっかけで誰でも、いつでも、自分の住む地域や人、そして自分の価値観との「出会い直し」の瞬間が待っています。

にしとも広場18号は、９月発行予定です。お楽しみに！

“にしとも広場”ってどんなとこ？

にしく市民活動支援センター“にしとも広場”は、人と活動のつながりづくりを応援する場です。
「何か始めたい」「活動の場を広げたい」「活動に役立つ情報を知りたい」といった
ご相談をお待ちしています。

にしく市民活動支援センター
にしとも広場

管理運営：認定ＮＰＯ法人市民セクターよこはま
TEL/FAX：045-620-6624

Ｅメール　ni-shiencenter@star.ocn.ne.jp
ホームページ　https://nishitomo-city-yokohama.jp/
住　所　横浜市西区中央1-5-10 西区役所1階
開館時間　9:00～17:00
休館日：毎週水曜日・年末年始（12/29～1/3）
アクセス　京浜急行「戸部駅」徒歩８分
相模鉄道「平沼橋駅」徒歩 10 分

情報紙「にしとも広場」は、
西区内の郵便局、地区センターやコミュニティハウスなどの公共施設に配架しています。

発　行：にしく市民活動支援センター“にしとも広場”
発行日：2021年３月

承認西区第９号